

4 考 察

ヤマセの影響の強い太平洋沿岸は、内陸の五戸町より夏季の気温が2℃～3℃低く、標高400～600mくらいの気温に相当するものと考えられるが、高冷地の気象と異なる点は、湿度が高いことと、温度較差が小さいことである。現地における湿度、温度とレタスの病害発生との関連については今後の検討に待たなければならない。

生育は、5月まきでは気温の低いヤマセ地帯で生育が内陸より遅れるが、6月まきでは15～20℃の生育適温となるため内陸より生育がよい。

花芽分化の有効積算温度は、長野県で1,500～1,700℃とされているが、青森県の場合は1,200℃内外で花

芽分化が見られる。このことは日長が関与していると考えられる。

花器の発育についてもヤマセ地帯で緩慢であり、抽苔の危険は内陸より少なく、夏採りレタスの栽培の有利な地帯である。

品種では、早生型で晩抽系のオリンピアが従来栽培されているGL-366より花芽分化も遅く、結球も早い。また、生産球も360g～600gの範囲で、完全球割合も95%以上収穫できることから有利な品種であると考えられる。

以上のことから、青森県平担部のヤマセ気象の影響の強い太平洋沿岸地帯は、高冷地同様夏採りレタス栽培が可能であることが明らかとなった。

キュウリの温度管理に関する研究

第3報 春系キュウリの定植後変温管理について

横川庄栄・小山田光男・三浦孝雄

(山形県園芸試験場)

1 ま え が き

第2報において、春系キュウリの定植後夜温は15℃を目標に管理するのが、初期生育を促して収穫始期を早めるとともに、上物収量を増すことを報告した。しかし15℃一定に管理すれば、生育過多(ツルボケ)になりやすいことからこれを抑える一方法として変温管理を考え、昭46年に試験を行い、47年には再確認の試験をし一応の成果を得たので報告する。なお本報告は47年度の試験成果をもとに作成した。

2 試 験 方 法

供試品種「松のみどり」を1月5日には種し、育苗夜温を15℃を目途に管理し、例年にない多日照の気象のため、短日処理をした苗を2月15日に定植した。その後7節以下の雌花及び側枝を摘除して、15℃区の10節雌花開花時の3月13日に変温処理を行った。温度設定は145m²のフェイロンハウス内をポリカーテンで当初東西に2分し、変温処理後は南北に2分した。

設定温度は第1表のとおりである。

第1表 温 度 処 理

区	当初夜温	変温後夜温
15℃一定	} 15℃	15℃
降 温		10°
昇 温	} 10℃	15°
10℃一定		10°

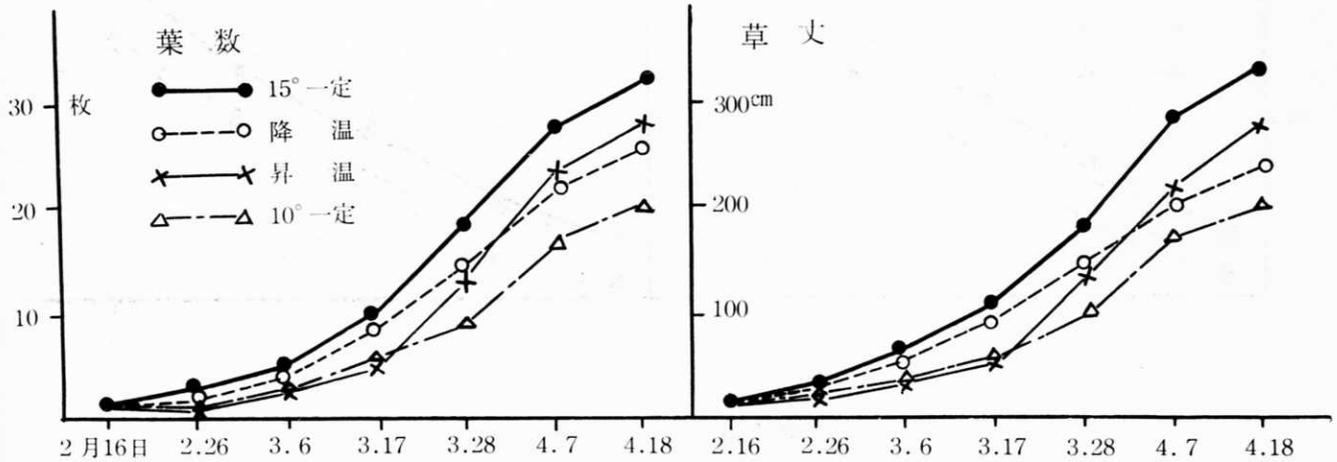
3 試 験 結 果

1 温度経過は当初夜温15℃区で目標温度よりやや高めに経過し、変温後は2夜7℃まで下がったほかは±2℃くらいで15℃、10℃区ともにおおむね目標温度を得た。また温風暖房機の位置により当初夜温に区間差が生じ、15℃一定区及び10℃一定区がやや高めに経過した。

2 草の伸びは第1図に示すように当初夜温15℃区は10℃区に比し草丈葉数ともに優れ、変温後降温

区は10℃一定区と、昇温区は15℃一定区と同様の生育相を示し、各当初夜温一定区に比し、差は4月20日ころまで拡大して、以後のその差は試験打切日まで続

いた。また変温処理までは降温及び昇温の変温区は各一定区に比し生育が劣ったが、これは当初夜温の区間差の影響によるものと思われる。



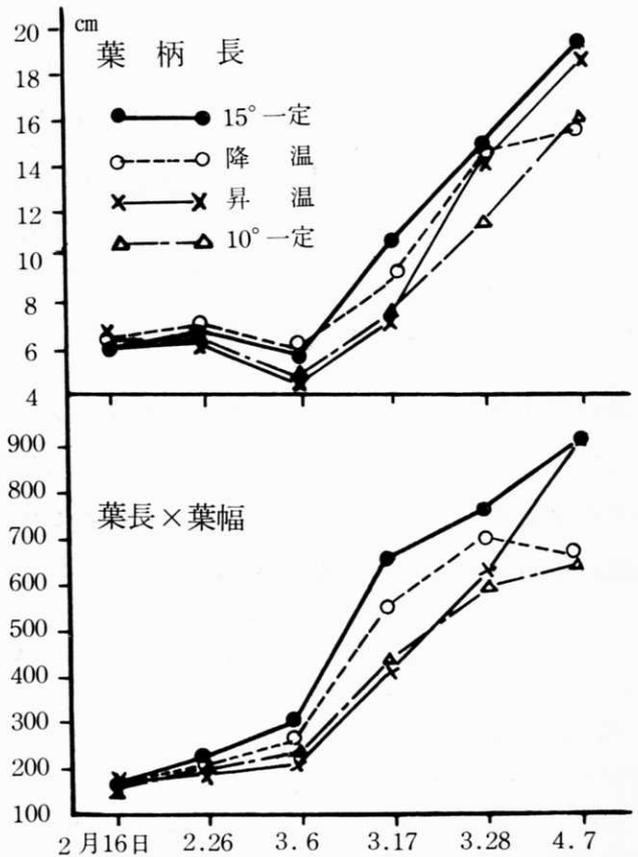
第1図 葉数及び草丈の推移

葉の大きさに対する変温の影響は第2図に示すように草丈、葉数の場合よりも緩慢で、処理後2週間ころから現れ、4月7日では15℃一定区と昇温区、また10℃一定区と降温区がほぼ同じ大きさとなった。

してくず果を多くしたものと思われる。

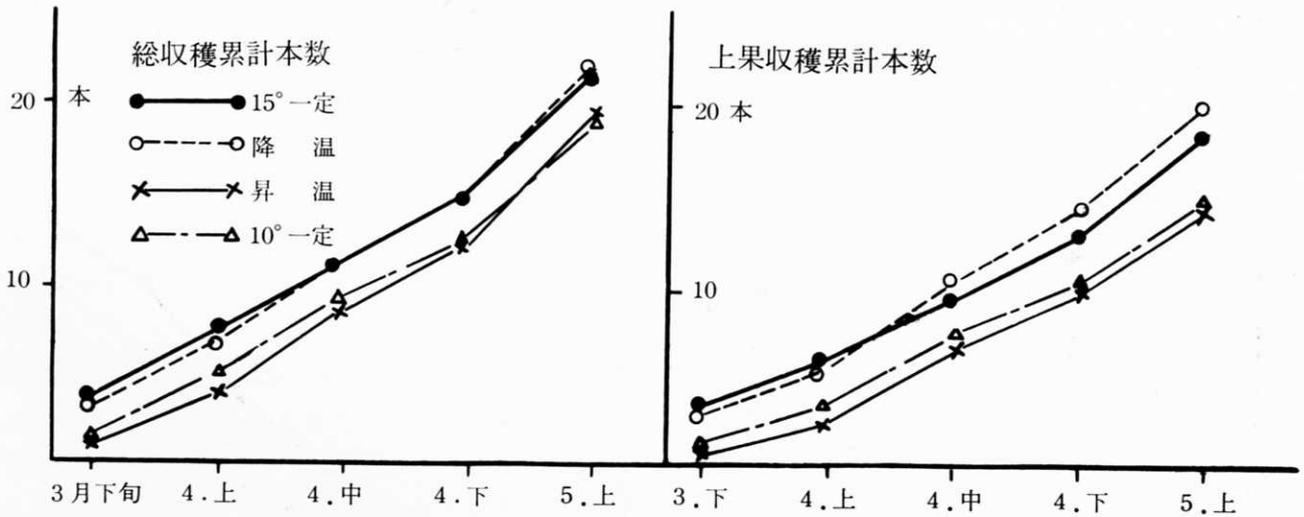
3 主づる6節以上の雌花着生は、各区とも100%であった。

4 総収量は第3図に示すように初期生育の旺盛な当初夜温15℃区が10℃区に比し収穫始めが早く、早期収量が多くなった。また15℃一定区に比し、当初夜温の区間差の影響により下位となっていた降温区は日数経過につれ収量を増し、4月下旬には同収量となった。一方、昇温区は10℃一定区に比し、当初夜温がやや低目に経過したので、早期収量が少なかったが、生育が進むにつれ幾分増収となった。しかしながら同収量とはならなかった。



第2図 葉の大きさ

これを上物収量で見るとこの傾向はより顕著に現れている。15℃一定区に比し下位となっていた降温区は4月上旬でほぼ同位となり、中旬では上位を示し、4月下旬まで差を開いた。また早期収量において10℃一定区と昇温区との差が、総収量での差よりも大きいのは、当初夜温の区間差が、10℃の場合強く影響



第3図 収 量

4 ま と め

以上の結果により、春系キュウリの定植後夜温管理は、当初 15℃を目標にして初期生育を促して早期収

量を増し、10節ころの雌花開花時から10℃を目標に管理して栄養生長過多になるのを抑え上物生産を高めることが望ましい。

ハウスキュウリ液肥施用について

高橋良治・小野公二・小原房雄

(岩手県園芸試験場)

1 ま え が き

最近東北地方において、ハウス栽培面積が年々増加している。しかし、ハウスの大型化に伴い管理作業の省力化の要請が強くなっている。ハウス栽培における施肥の省力化を図り、土壌の悪化防止にも有効な液肥

の施用方法について検討した。ハウスキュウリに対し昭和44～47年にわたり試験を実施した結果、元肥を堆肥のみとし、液肥を施用した区及び元肥を堆肥と化成肥料とし、追肥に液肥を施用した区が、化成肥料で追肥した慣行区と同等またはそれ以上の収量が得られ、液肥施用が有効な手段と認められた。

2 試 験 方 法

1) 耕 種 概 要

年 度	播 種 期	定 植 期	畦 幅	株 間	条 数	仕 立 本 数
44・45年	2月12日	3月25日	120 cm	100 cm	2	2
46・47年	"	"	"	60 cm	2	1